

資料③ 個別支援計画作成の過程

ザッと流し読みしてください。分かる必要はないです。本当にザッと黙読してください。別紙も同様に流し読みして下さい。

① インテーク（受理面接・必要ならばリファー（送致）を行う過程）

ご本人の基本情報（氏名・住所、来所経緯・動機、主訴、支援への希望など）の収集。

当機関で支援可能な主訴なのかどうかを判断し、難しい場合は他機関を紹介する（リファー）。

数回の面接等を経て、サービス利用契約をするか否かの意思確認をする過程でもある。

留意点：ラポール（信頼関係）構築と主訴を捉える事の2点が目的である。

具体的手法：ラポール構築にはバイスティックの7原則（援助関係を形成する技法 別紙に詳細あり①個別化②意図的な感情表出③統制された情緒的関与④受容⑤非審判的態度⑥クライアントの自己決定⑦秘密保持）を、主訴を捉えるには100文字要約技法を用いると取り組みやすい。

② アセスメント（評価・情報収集・情報分析の過程）

情報収集・情報分析・ニーズや解決すべき事柄の明確化・ストレングス評価。

ご本人・ご家族や関わりの深い方（キーパーソン）から、お話を伺うと共に、関連機関からも直接お話等を聞き（専門職ヒアリング）、情報の収集と分析を行う。

丁寧に正確なアセスメントがなければ、プランニングができない。

留意点：「ご本人主体」「ストレングス評価」の2点から逸脱してはならない。

これらが常に念頭にないと、パターナリズム（支援者主観かつ恣意的（理論や根拠なく場当たりの）判断で行う支援）に陥る。パターナリズムは支援の崩壊を意味する。

ご本人の”情緒的サポート”をしている人が、居るのか居ないのか、居るのなら誰なのかという情報はとても重要である。この”情緒的サポート”が欠けていると孤独や孤立の状態になる。

具体的手法：エコマップを作成し、インフォーマル・フォーマルの社会資源を分析する。必要に応じてソーシャルサポートマップを作成し、社会資源同士の相互関係・相互作用も分析する。

ご本人とのラポールを深めつつ、ブラッドショウの4つのニーズ概念（下記及び別紙参照。）を用いて、ニーズの分析をする。

ブラッドショウによる4つのニーズ概念

I. エクスプレス・ニーズ(本人が表明したニーズ)	II. ノーマティブ・ニーズ(専門職が判断するニーズ)
III. フェルト・ニーズ(本人の自覚はあるが顕在化されていない隠れたニーズ・真のニーズ)	IV. コンパラティブ・ニーズ(同等の他者と比較して想定されるニーズ)
I・IIIは本人からのニーズ	II・IVは第三者が把握しているニーズ

③ プランニング（支援目標設定・支援計画策定の過程）

アセスメントの結果、ご本人のご希望・ご家族のご希望と、支援者からの提案を具体的な支援目標として設定する（支援者からの提案は、ご本人の理解を得た場合に限る）。

支援目標を達成する方法（各種アプローチ）を明確化し、ご本人・ご家族・支援者（関係機関・計画策定担当者等）が同席の上（ケア会議・ケースカンファレンス）、実際の支援計画を確認・共有する。

留意点：ストレングスの向上とエンパワメントが主題である。そこに、ご本人を取り巻く様々な社会資源へのエンパワメントとご本人とそれら社会資源との関係性の調整という要素を加えて、ご希望・支援内容・目標達成期間・優先順位・見直し期日（モニタリング）等を決めていく。

④ 支援計画の実行（支援計画を実際に実施する過程）

留意点：ご本人・ご家族・支援者（関係機関・計画策定担当者等）、それぞれが担っている支援展開がある。支援目標の達成に向けて、状況理解と役割分担を共有（アプローチが違って同じ点（支援目標）を見据えて、それぞれがその点に向かって支援展開していく事。）しチームアプローチを継続する為に、連絡調整をし続ける（波長合わせ・意思統一）。

⑤ モニタリング（経過観察・支援計画のズレの有無を判断する過程）

支援計画を実施した結果の点検・見直しを行う段階。

ニーズと支援にミスマッチが起きていないかや、支援の効果があるかないかを評価する。

ケースによって、計画策定からのモニタリング時期は、数週～数ヶ月と幅がある。しかし、最低でも半年に1回は行う。

留意点：ミスマッチが起きている場合や、支援の効果が得られていない場合は、再アセスメント（アセスメント段階に戻り支援計画を再考する事。）を行う。

新たに優先順位が高い解決すべき事柄が発生した場合は、設定したモニタリング時期に関わらず、モニタリングし再アセスメントする。

必要に応じて
再アセスメント
②へ

⑥ 全体評価（事後評価（エヴァリュエーション）・支援の終結に向けた過程）

数回のモニタリングを経て、支援効果が得られ、目標が達成された場合に、ご本人・ご家族・支援者（関係機関・計画策定担当者等）が、支援計画の終結を合意した時に行われる確認作業の事。

留意点：支援の終盤では、ご本人が目標達成を認識し、支援の終結がやってくる事の心の準備ができるように最大限の配慮をする。

一人で”進む”事への恐怖や不安により、達成できていた事柄が退行する場合があります、「支援が終わる」という事が、”何かと切れる”のではなく、ご本人の努力によって、ストレングスが向上し、ご本人の『困り事』に対応するエンパワメントの力が高まったという事実を、しっかりとご本人とフィードバック（振り返りと評価）する。『困り事』が出てきたら、いつでも話せる関係がある事（ご本人の社会資源の一つであるという事。）を伝えて、「関係性が終わる」訳ではない事も合わせて伝える。

支援展開していく上で意識する事柄を3つ。

インテークの段階から終結を思い描いて支援展開をしていく事が大切です。

着地点のない話は、聞いている方として何を話されているか理解に困り、時間だけが過ぎるのと同じで、着地点を想定していない支援は、支援展開として成立しないです。

着地点を想定して支援展開する事を、自身に常態化させる為には、どの場面においても、ご本人支援において一挙手一投足にPDCAサイクル（Plan 計画 Do 実行 Check 評価 Act 処理の事。Aで終結や再Dや再Pをする事を判断し支援終結を図る。）を以って、関わる事が必須です。PDCAなき言動は、パターナリズムや虐待の芽となる事を自覚して、OJT を事業所全体で進められるような職場環境を構築しましょう。

所属組織での日々のミーティングや事例検討の場で報告する事で、他ケースへの支援展開のヒントになり、一人の支援員だけでなく組織のボトムアップに繋がります。現在の個別支援は、従前の勘と経験と度胸に頼った属人的な支援展開ではなく、科学性（理論）とスキル（支援技術）を兼ね備え、普遍的（誰が行っても同じ支援となる事）な支援展開を実践する事になっています。日常的に実施できる施設内ケーススタディの実践を繰り返し行い、組織のボトムアップをすると、個別支援計画策定のアセスメントとプランニングがしやすくなります。

傾聴スキルにはバイスティック7原則実践や4つの受容過程理解などがあります。

アセスメントにはブラッドショウの4つのニード論や各種アプローチ法などがあります。

知識を覚えることではなく、そういう理論・概念があるのだという事を知っていて、どこを調べれば分かるのかを知っているという事が重要です。

しかもその知識は、独断的な趣味趣向の類の事柄ではなく、学術研究され根拠のある事柄でなくてはならないです。

エビデンスの取れている理論・概念を支援実践する事が現場の仕事です。

個別支援計画作成には、「傾聴」「アセスメントとモニタリング時の調査・分析」が基礎となります。その準備ができて、やっとケースワークにつながります。